2007年03月24日

平成19年度愛媛大学卒業式　式辞

本日ここに平成19年度卒業式を挙行するにあたり、学位記を授与された1,879名の卒業生の皆さんに、心からお祝いを申し上げます。また、本式典にご出席をいただきましたご父兄、ご関係の皆様に対して、お慶びを申し上げますとともに、日ごろからの本学に対するご理解、ご支援に対しまして、この機をお借りいたしまして厚く御礼申し上げる次第であります。

本日のこの晴れの式典には先ほどご紹介させていただきましたように、各界を代表する多数のご来賓の皆様のご出席を賜りました。お忙しいなか、ご臨席を賜りました皆々様に心より御礼申し上げます。

卒業される皆さんは、この4年間あるいは6年間、さまざまな困難や試練を乗り越えて、今日のこの日を迎えるに至ったことでありましょう。皆さんの日ごろの精励に対し、心から敬意を表し、その努力をたたえるものであります。同時に、苦楽をともにした友人、先輩や後輩、それになによりも指導教員や職員の暖かい支えがあったことを忘れないでいただきたいと思います。大学で自らが得た知識や技能のみならず、このような人間関係や人々との交流の経験は、これからの人生の糧となるものであります。

さて、皆さんの多くは卒業後、社会に巣立って行く訳ですが、大学卒業は人生の一つの重要な節目であり、新たな社会人としての旅の始まりであります。その重要な節目にあたって、自分のなすべきことは何かを考え、目標をしっかりもって努力すること、このことにぜひ取り組んで欲しいと思います。

今年卒業する学生の皆さんの就職状況は、94%を超えることが予想され、まずまずの状況であると思っております。しかし、そうはいっても希望しても就職できない人が二桁の数で存在することも事実であります。求人数は十分ありますから、就職希望者は必ずどこかに入ることは可能であると思います。自分の希望するところがないとか、自分探しをするということを聞きますが、大学を卒業したらまず、正社員になることが大事です。そして、就職したらどんな企業や職場であっても最低 5 年間はそこで社会勉強のつもりで頑張っていただきたい。社会に出ると学生時代には思いもよらなかった経験に遭遇し、また、いろいろな人が自分の新たな能力を引き出してくれます。でありますから、会社に入って自分の能力や適性に合わないと最初のうちに感じたとしても、すぐにそう決めつけ、あきらめてしまわずに、腰を据えてじっくり仕事に取組むことが大切です。これからの 5 年間は最低限、社会人になるための勉強の期間です。実社会の仕事とはどういうものか、社会人としての行動の仕方、

人との関係はどのようにしたらよいか、どのような知識や能力が必要か、得た知識をこの先どう活用するか、皆さんが社会人として自立してゆくために学ぶべきことは沢山あります。入社後の 5 年間はまさに仕事の中で学ぶ、オン・ザ・ジョブ・トレーニングの時期と心得て、何でもやり抜くことが肝要です。

社会人 5 年目は皆さんにとって次の段階に向けての重要な節目になります。この時期になれば、自分を取り巻く社会の動向を読み取ることもできるようになり、これまでの経験から自分に何ができるか、課せられているものは何であり、これから何が必要か、自分を省みて、将来への生き方を考え、身の振り方を考える時期でもあります。

このような重要な節目は人生の中で何回か訪れます。そのような時に自分の任務や必要な課題についてじっくり考え、必要な努力を行い、自分の振る舞いを反省するのかどうか、あるいは、何もしないで過ごしてしまうのか。節目、節目で必要な手だてを尽すのかどうかで、その後の人生は全く違ってしまうと言われております。皆さんはこのことをしっかり胸にしまっておいていただきたいと思います。

組織や社会の中で自分の振る舞いについて考えるとき、どういう視点、観点で企業や社会を見るかが問われます。とくに、今日のように様々な利害が錯綜し、グローバル化の急速な進展の中で企業間の競争が激化し、華やかな光りの部分と、希望を失わせるような暗い影の部分が交錯する状況においては、確固たる信念に基づいて冷静にこの社会に対面する必要があります。

最近のわが国の状況について、没落の道をたどりつつある、あるいは、社会の様々なシステムが崩壊しつつある、というネガティブな見方が広がっております。日本の一人当たりの国内総生産が OECD 加盟国中 18 位に転落し、「経済は最早一流ではない」と言われております。 いや、果たして一流であった時期があったのか、という疑問の声もあります。確かに GDP 国民総生産はドル換算では二番目ですが、為替レートではなく購買力平価と呼ばれる値、すなわち国民が GDP の総額でどれくらいモノを買うことができるか、という基準で比べてみると、1970 年代から今日まで、日本は OECD 加盟国の平均に近いところにあって、ほとんど変化がなく、豊かさという点ではかつて一流であったことも、GDP が世界第二位であったこともない、というのが実情のようです。

このことは私たちの生活実感とも一致します。わが国社会は高度成長期以降も、福祉や医療、介護や子育て支援、文化や芸術、教育に対する国の支出が依然として先進国並みになった試しがありませんし、経済の発展とともに、政治的にも民主的で文化的な成熟した社会が実現する方向に向いていないのが実情です。実際、OECD 加盟国 24 カ国のなかで、所得

の格差を示す相対貧困率が日本はアメリカに次いで二番目に高いこともそのことを示しています。教育、とくに高等教育にかかる国の支出は欧米先進国に比べ半分の比率であり、教育費は各家庭が負担するもの、というのが常態になっています。子育てに大変なお金がかかることが、子供をつくらないこと、その結果として少子化の最大の要因だということであります。

こうして見るとわが国は没落するのではなく、まだ社会的、経済的、政治的に未成熟な発展途上の段階にあるのであり、これから本当の発展を作り出さなければならない、ということを意味しています。とくに、一極集中の度合いが強まり、一つの大都市圏だけが繁栄し、地方がどんどん取り残されるような国は、まだまだ、政治的にも経済的にも未熟な段階にあるのだということを認識する必要があります。経済的・文化的な先進国においては、知識を基盤とするポスト工業社会の段階に到達しており、中央と地方の役割は対等であり、その重要性においても同等であるのが常識になっております。

わが国の近年の地方の低迷の最大の要因は人材の不足と流出にあります。ポスト工業社会における経済活動は、人材を集め、人を育て、さらに多くの人を集めることの競争であります。いい人材が多く集まれば新しい技術が生まれ、企業が興り、これに伴って優れた人材が集まり、企業が集積し、多くの人が集まる、そこに魅力ある文化が創られ、自律的な住民本位の地方自治が育ち、優れた魅力的な大学が成長し、さらに優れた人材が集まる、という好循環が実現します。知識基盤社会では資本が財を創るのではなく、人が財をつくり、人が財をもってくる社会です。それを地方において実現させることが、これからわが国が成熟した社会へと発展することを保証する途です。

皆さんの多くは県外に就職する人が大半でありますが、県内に就職する人たちには大いに能力を発揮して、この地域の発展を牽引してほしいと思います。また、県外に就職する人、とくに、首都圏に赴く人たちには日本の社会の健全な発展のために、この大学で培った能力と見識を十分に役立てて活躍をしていただきたいと思います。そして、さらに力をつけた段階で、転機が訪れることもあるでしょう。その時には、今度は地方に帰って、その培った力を地方の発展のために役立てていただきたいと願っております。

人は一人では生きられないし、一人でできることは限られています。日本の社会の利点は、人と人とのつながり、人と社会とのつながりを自然につくりあげることができ、それを巧みに活用するところにある、と言われています。人と人とのつながりを忘れ、誤った個人主義すなわちエゴイズムに陥ることによる弊害が、現在の社会の混迷をもたらせている一つの要因でありましょう。このような時こそ日本の社会の強みである人と人のつながり、人と社会のつながりをつくる力を見直す必要があります。

若い皆さん方は、発展途上にあるわが国社会を成熟させる責任があります。そのために個人的な利害にとらわれ、あるいは、個人的な興味の中に埋没することなく、社会の経済的な発展や、進歩のために力を尽くして欲しいと思います。

もちろん、社会の進歩とは、物質的な富の増大だけでなく、政治的、文化的、精神的などあらゆる面で、人間生活を豊かに、向上させるものでなくてはなりませんし、同時に、新鮮な空気や水、海や川、森や山の豊かでクリーンな環境を保存することでなくてはならないでしょう。

この他にも、もっと広く人類共通の課題、地球温暖化の原因と見なされる炭酸ガスの削減、省エネルギー化や森林資源の保全、安全安心な食糧や水の供給など、抜本的な解決を展望した人類的な課題に真剣に取り組まなければ、私たちの存在自体が危険にさらされることになりかねません。大事なことは、皆さんの学びと研究の中で鍛えてきた知の力は、ご自身の宝であると共に、なによりも人類共有の財産として活かして行かなければならないということなのです。

今年卒業される皆さんは本学が国立大学法人となって最初に入学した人たちであります。法人化以降、私どもは本学を学生中心の大学にするために、様々の改革を行って参りました。皆さんは本学の改革の途上において卒業期を迎えることになったわけであります。改革の完成を期待されていた諸君にはやや心残りのことだったかと思います。私たちは引き続き本学の改革に取組み、皆さんの期待に応えて行く覚悟であります。皆さんが本学校友会の一員として、本学とのつながりを持ち続け、卒業生との絆を強め、本学の改革を応援していただきたく、心よりお願い申し上げる次第であります。

皆さんが愛媛大学で培った知の力をいかんなく発揮され、人と人とのつながり、社会との良好なつながりを創り続け、未来の可能性に果敢に挑戦し、活躍されますことを心から願いまして、はなむけの言葉といたします。

平成 20 年 3 月 24 日　　愛媛大学長　　小松　正幸